

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 20 日現在

機関番号：17401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010 ～ 2011

課題番号：22820046

研究課題名（和文） 元刊雑劇における人称代名詞の体系

研究課題名（英文） The Personal Pronouns in Zaju Published in Yuan-Dynasty

研究代表者

宮下 尚子 (MIYASHITA NAOKO)

熊本大学・教養教育実施機構・非常勤講師

研究者番号：60420618

研究成果の概要（和文）：

(1) 元刊本に見られる2人称代名詞について、変化の過程を明らかにした。(2) 元刊本で用いられる1人称代名詞について、字体、音韻的特徴、文法的機能の諸点から考察し、従来異体字ではあるが同義的とされているものについての異なりおよび版本間での出現には明らかに時代的な偏りが見られることを明らかにした。(3) 元曲に見える非漢語の親族呼称についての考察を行った。(1) と (3) はそれぞれ学術論文として公刊済みである。(2) は口頭発表を行った。

研究成果の概要（英文）：

This study explores: (1) the process of language change in second person pronouns in Yuan-kan Zaju Sanshizhong and (2) first person pronouns in Yuan Dynasty plays with specific reference to character styles, phonological features and syntactic structures. Although considered as variant characters, these aforementioned linguistic features are examined (3) as being synonymous with non-Chinese usage in Yuanqu. Part of this work, (1) and (3) previously appeared in the Kyushu Chugoku Gakkaiho No. 49 (2011) and No. 50 (2012). The second paper was read at the Regional Regular Meeting of CLSJ (December 17, 2011, Kumamoto University).

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,210,000	363,000	1,573,000
2011年度	1,110,000	333,000	1,443,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,320,000	696,000	3,016,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：人文学・言語学

キーワード：

(1)人称代名詞 (2)近代漢語 (3)言語接触 (4)包括形・除外形 (5)歴史言語学
(6)『中原音韻』(7)元曲 (8)元雜劇

1. 研究開始当初の背景

本研究の目的は、元の時代に編纂・刊行された戯曲テキスト『元刊雜劇三十種』に関して、その中で用いられている人称代名詞の用法及びその体系を把握し、明らかにすることである。

元代雜劇とは、脚本が現存する中国の演劇作品としては最も古いものである。また、現存する白話文学の資料としても最古の部類に位置することも付け加えておかななくてはならない。文語を文章の基調として重んじる伝統を持つ社会にあって、口語文学の存在は非常に希有であるが、庶民を対象として演じられた戯曲の台本という性格上、『元刊雜劇三十種』は、舞台上で喋られる科白や歌辞をそのままに記録するという営みの結果生じた、当時の社会的な要求にも合致した文学作品であると考えることができる。

さて、本研究の研究対象となるテキスト『元刊雜劇三十種』とは、元代の戯曲のテキストとして今日残された唯一のものであるが、印刷の不鮮明さに加え誤字脱字当て字等に満ちた読みにくいものであり、また元曲にとってはものがたりの筋書きを知る上で必要な科白の部分が大幅に省略されている。そのため、「版式字體ともに甚しく鄙俗である。歌辭は全文を録するが、白は甚しく簡略である。その體裁は、現在街頭でひさがれてゐる京劇の唱本を髣髴させる」（吉川幸次郎『元雜劇研究』p. 48）と評されるように、従来、元曲の研究対象として扱われることはほとんどなかった。吉川幸次郎博士も『元雜劇研究』（1948

年、岩波書店）の研究対象としては『元刊雜劇三十種』ではなく明代に改訂された『元曲選』を採用されたというのは周知の通りである。

これら作品のなかには、元の頃すでに楚末ながらも版本をもつものがあつた。後に説く京都帝國大學覆刻の元刊本は、その實例である。また明の李開先の「詞諺」（二卷）には、「蕭何追韓信」の第二折『新水令』一套を「元刻」によって鈔出してゐる。そのいはゆる「元刻」が、いかなる本であつたか、固より詳細を知り難いが、この劇は恰かも京都大學覆刻の元刊本に収められ、字句は両者大たいに於て一致する。しかしかく版に上されたものは、少数であり、大部分は写本によつて流傳されつつ、明の世に及んだと考えられる。（p. 41）（下線は応募者による）

この頃（応募者注：明の萬曆年間頃）には元人の雜劇を、選擇刊行した叢書が、踵を接して世に出た。うち最も集大成の實をあげたのは、臧晉叔の「元曲選」またの名は「元人百種曲」であつて、この書一たび出でてよりは、この本のみひとり世に行はれ、清を経て今に及んでゐる。私がこの研究に、主要な資料として使用するのも、この本である。（p. 42-43）

『元刊雜劇三十種』の影印は1958年に『古本戯曲叢刊』四集の一部として出版されている。校定としては、しかし近年、状況は変化

し、『元刊雜劇三十種』に関して、『元曲選』や覆刻本ではなく元刊本の影印本に基づいた校定や研究が行われるようになった。鄭騫（1962）、徐沁君（1980）、寧希元（1988）、赤松紀彦他（2007、2011）等である（鄭騫1962は元来覆刻本をもとにしており、後に影印本により訂正を加えたが、修正は全体にまで及ばなかった）。

ではこれらの先行研究を以て元刊雜劇の校訂作業は終了したかというところではなく、影印の元になった元刊本の性質上、いずれも校定者による字句の大幅な改訂を免れない。加えて、現在利用可能な電子コーパスのひとつである中央研究院漢籍電子文献のデータは、寧希元（1988）を元に入力、簡体字から繁体字への機械的な修正を行ったものと考えられるが、字句の改訂やあやまりが甚だしく語学の研究に利用できる水準にあるとは言い難い。当然のことながら、これらの電子コーパスを利用して行われた先行の諸研究に関して、データを扱う上での厳密さや正確さ及び結果について疑問を抱かざるを得なくなる。したがって、語学の研究がテキストの存在に依拠して行われるためには、既存の校訂や電子コーパスは参考するにとどめ、やはり研究者自身で一から、誤字脱字当て字略字と思われるものをも含め影印本に忠実に取り組むべきなのである。そのため、応募者は『元刊雜劇三十種』に関して、省略された字体や誤字についてもできるだけ忠実に反映した独自のコーパスの作成を試みる。表記にはユニコードを用い、ユニコードに存在しない字体については、外字は作らず、括弧{}により扁旁を分けて表示する、あるいは記号で埋めて別途注により字体を示すなどの工夫をする。これは、テキストの字体をできるだけ忠実にコーパスに反映させ、同時に検索の便も保ちたいためにおこな

う処理である。本研究は、その背景としてまずテキスト自体の校閲を影印により研究者が独自に行うことより始まると言ってよいであろう。

2. 研究の目的

本研究の目的は、元の時代に編纂・刊行された戯曲テキスト『元刊雜劇三十種』に関して、その中で用いられている人称代名詞の用法及びその体系を把握し、明らかにすることである。これは、『元刊雜劇三十種』において行われている当時の漢語—元代漢語—の文法体系、および当時元朝の支配下において進行中であつたと想定される言語接触と言語変化を明らかにするというより大きな研究（全体構想）の中の一部となる予定である。

本研究において、『元刊雜劇三十種』と呼ばれる戯曲を人称代名詞研究のテキストとして用いる理由は、何よりもまずそのテキストとしての存在の特異性にある。このテキストでは明代において改訂されたテキストには存在する科白がほぼ省略されており、テキストのほとんどが歌唱部分で占められている。また、テキスト自体（影印）も略字や誤字に満ちた粗末なものである。しかし、それを上回る優位性がこのテキストには存在する。つまり、テキスト中に用いられる歌辞は、既に存在する旋律に当てはめて作詞が行われなければならない。既存の旋律に当てはめて作られる歌詞は、旋律の要求を満たすために、詞の長さや押韻などの種々の制約が存在する。この制約が、当時の音韻体系を反映したものであり、また、元刊雜劇における人称代名詞の用法に大きな影響を与えていることは、二人称代名詞において「伊」と「你」が平仄によって使い分けられるという事実によっても既に明らかである。本研究では、個々の人称代

名詞の用法という研究から更に一步踏み込んで、人称代名詞全般を視野に入れた研究を行い、従来の元代漢語の研究においてあまり区別のはっきりしなかったり、あるいは異体字であるとして処理されてきた「恁」と「您」と「你」、「俺」と「我」等のヴァリエーションについても、音韻構造による解釈、および、人称代名詞の体系の構築という観点からその区別と意味・用法について明らかにしていくことを目的としている。

3. 研究の方法

(1) コーパスの作成：まず準備の段階において、正字体、簡体字、JIS といった特定の言語圏に使用が限定される文字コードを用いた既存のコーパスに依存することなく、独自のコーパスを作成する。既存のコーパスとして現在利用可能なもののひとつに中央研究院漢籍電子文献のDBが存在するが、これは、寧希元(1988)を元にしたものらしく、また、字体に関しても簡体字→繁体字への機械的な修正を行ったと考えられるが、字句の改訂やあやまりが甚だしく、また、『元刊雜劇三十種』でありながら実際には「大都新編關張雙赴西蜀夢全」の収録を欠く等の大きな欠陥があり、語学の研究に利用できる水準にあるとは言い難いのである。今回のコーパスの作成にあたっては、Unicodeを使用することで、非常に広い範囲で『元刊雜劇三十種』中に現れる字体を検索可能文字として扱うことが可能になる。しかし、全ての異体字について訂正を施すことなく入力するので、異体字についての情報がなければ検索の用途には不向きである。したがって作成したコーパスを研究成果の一部として公開することは現在のところ考えていない。

(2) 韻書字書による当時の記述の調査：各種韻書における人称代名詞に関する記述の抽出を行う。現代漢語の人称代名詞に関する先行研究の調査および各種韻書における人称代名詞に関連する項目の記述を抽出、訳読し分析を行う。その際に用いる予定の韻書とは、中国のものに限らず、朝鮮および日本の韻書も含まれる。現在予定しているものは次の通り：『中原音韻』『蒙古字韻』『五音集韻』『四聲通解』『千字文』『切韻』『広韻』『集韻』『五音集韻』『古今韻会举要』『中原音韻』『洪武正韻』『洪武正韻譯訓』『訓蒙字會』『單字解』等。

(3) テキスト(元刊本)を、白と唱の部分に分けて、それぞれ人称代名詞の使用状況を確認する

(4) 唱の部分については、曲譜の規則と歌辞の平仄が合致していることを確認する。従来、同義語とされていた「您」「恁」、「俺」「我」等がどのような規則に従って現れるのかを検討する。

(5) 曲用および包括形と除外形という観点も考慮に入れる：人称代名詞が格役割によって使い分けされていないか、独立要素として自立しているかについて検討する。特に、「我」が独立要素として文主語に多様されるのに比して、「俺」については、単数で用いられた場合は「俺嫂嫂」「俺福童孩」「俺家」「俺哥哥」のような属格的用法、または「俺李屠」のような同格用法が大部分を占めるのである。

(6) 当時(元の時代)の口語的な記述(『老乞大』や『全相平話』)との用例との対照：『元刊雜劇三十種』は独立したテキストであるが、テキストの存在する前提に社会というものを念頭に置いた場合、やはり同時代の白話文学の用例との対照も欠かすことはできない。幸い、『老乞大』および『全相平話』のどちらもテキストが影印として出版されてお

り、また、研究成果も現在非常に利用しやすい状態にある。

(7) 漢語以外の言語の文法体系との対照：当時の支配階級の言語であったモンゴル語の文法構造（特に人称代名詞）との比較を行う。モンゴル語の文法はNicolas PoppeのGrammar of Written Mongolian（1954^{1st}, 1991^{4th} Wiesbaden: Otto Harrassowitz）によれば、一人称単数は主格biと所有格minuとが区別されており、漢語の側でもそのような区別をしていることが予想される。

(8) 研究成果のとりまとめと公開：以上①～⑦の手順により研究を行い、『元刊雑劇三十種』の中の人称代名詞の使用について、曲譜との相関関係、同時代の資料の用法との関係、テキスト『元刊雑劇三十種』中における人称代名詞の使用に関する体系の解明、言語接触という観点からの他言語の影響についての研究等、本研究にかかわる研究成果は口頭発表および論文という形で速やかに公開する予定である。

4. 研究成果

(1) 元刊本に見られる2人称代名詞について、変化の過程を明らかにした。(2) 元刊本で用いられる1人称代名詞について、字体、音韻的特徴、文法的機能の諸点から考察し、従来異体字ではあるが同義的とされているものについての異なりおよび版本間での出現には明らかに時代的な偏りが見られることを明らかにした。(3) 元曲に見える非漢語系の親族呼称についての考察を行った。

(1) と (3) はそれぞれ学術論文として査読を行う学会誌において公刊済みである。

(2) は口頭発表を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

(1) 宮下尚子「元雑劇に見える〈阿馬〉および〈阿者〉について」『九州中国学会報』50、82-96頁。(査読有) 2012

(2) 宮下尚子「元代漢語における〈恁〉および〈您〉—『元刊雑劇三十種』を中心として—」『九州中国学会報』49: 74-88頁。

(査読有) 2011

[学会発表] (計1件)

(1) 宮下尚子「元曲元刊本における一人称代名詞」日本中国語学会 2012 年度九州支部例会、2012年12月17日、熊本大学黒髪キャンパス内くすの木会館（熊本県熊本市）。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮下 尚子 (MIYASHITA NAOKO)

熊本大学・教養教育実施機構・非常勤講師

研究者番号：60420618